

就労準備支援事業と社会参加推進事業の一体的実施における 4つの切り口からみた実績・評価

A:相談支援・啓発への寄与

【ケース①（就労準備）】

アサガオ親の会へのアウトリーチにより、当事者のご家族とつながるきっかけとなった。

【ケース②（社会参加）】

近隣高校への学校訪問や情報共有を継続していたことで、教員から相談を受けるに至った。

【総括】

継続的なアウトリーチを通じて各関係機関（支援機関・学校等）との連携を強化し、潜在的な要支援者を早期に把握・適切な支援へと移行させることができた。

C:就労準備支援事業と、補完する社会参加推進事業

【ケース①（就労準備）】

- ・福祉センターでのめーむひろば就労体験に参加することで、働くイメージや、できることが増え自信がついた。一方で店舗実習に進んだ時に実際の業務量や接客業務を通じて自身の適性を知る機会になった。
- ・事務体験に参加することで「パソコン関係の仕事に就きたい」という気持ちが芽生え、資格取得やIT関連の会社への就職活動につながった。

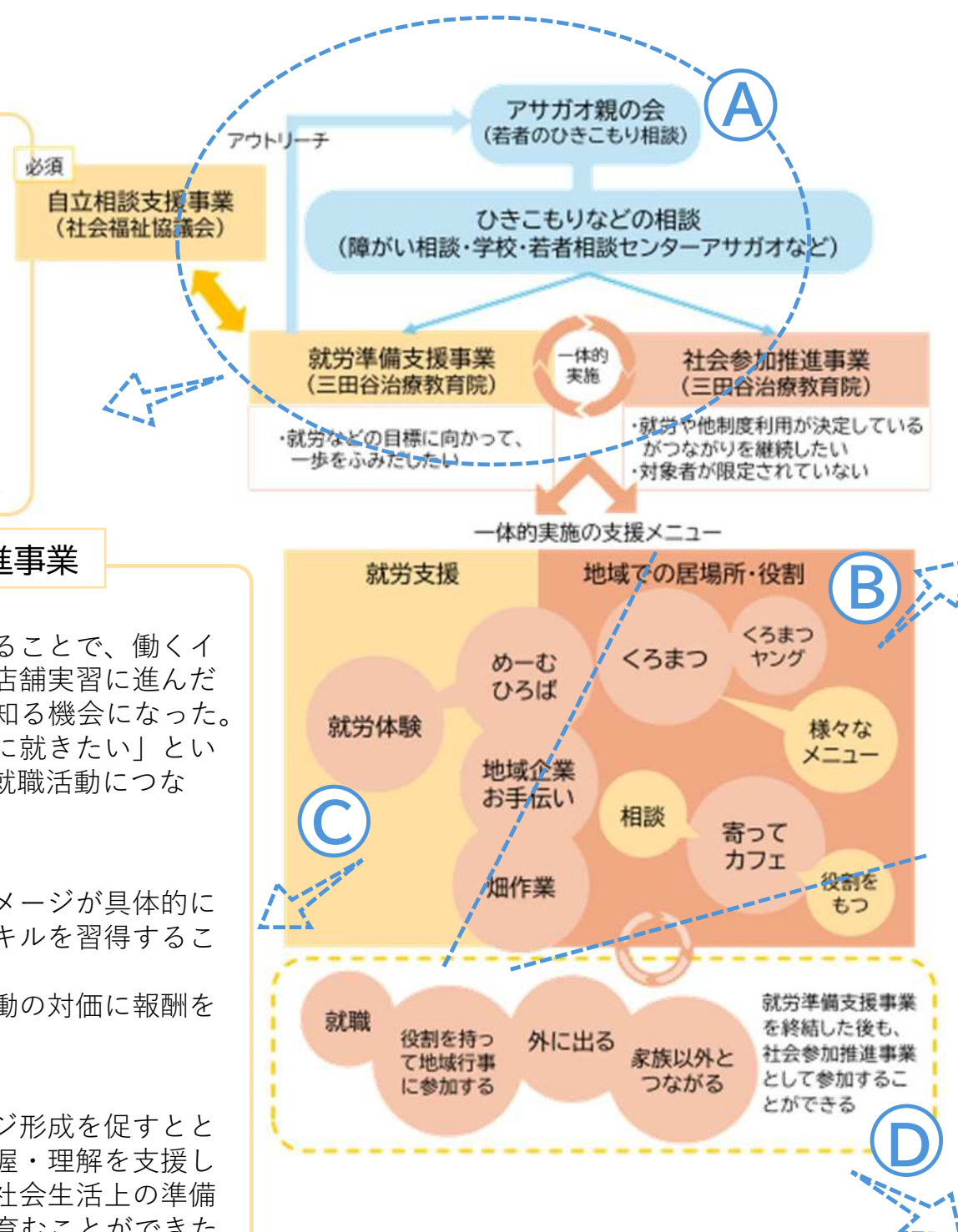
【ケース②（社会参加）】

・めーむひろば就労体験に参加したことで、働くイメージが具体的に
なり、強み・弱みに気づくことができた。また、スキルを習得するこ
とでできることが増え、自信につながった。

- ・有償の花壇の植え替え作業に参加したことで、労働の対価に報酬を得るという経験をすることができた。

【総括】

就労体験を通じて「働く」ことへの具体的なイメージ形成を促すとともに、実践を通じた自己の適性（得意・課題）の把握・理解を支援した。また、体調管理や時間遵守、言葉遣いといった社会生活上の準備性（マナー・習慣）を、スモールステップで着実に育むことができた。さらに、実際の取り組み状況を家族や学校等の関係者と共有・確認し合える体制を整えたことで、共通理解のもとで整合性のある支援を展開できた。



B:社会参加推進事業と、内包される就労準備の契機

【ケース①（就労準備）】

- ・個別面談を定期的実施することで少しずつ本人の気持ちを聞くことができた。

・本人が「やってみよう」という気持ちになったタイミングで プログラムの提案を行い、くろまつヤング、寄ってカフェ、畑作業に参加することができ、定期的に活動に参加する習慣ができた。

・くろまつヤングのプログラムでは家計改善支援事業担当職員も同席し、一人暮らしに必要なお金について学ぶ機会になった。

【ケース②（社会参加）】

・福祉センターのめーむひろばに参加したことで、コープこうべ職員をはじめ様々な人と関わる機会が増えた。

・畑作業やくろまつヤングなどのプログラムやイベントにも参加し、他の事業利用者とも関わる機会となった。

・多機関協働支援会議を通して、本人を知る支援関係者が増えたことで、本人が安心できる場となった。

【総括】

継続的なプログラムへの参加や他者交流を通じて、成功体験の積み重ねによる自己効力感・自己肯定感の向上を図ることができている。また有償活動への参加により対価を得る体験を提供できたことは、社会的自立や就労意欲の醸成に向けた大きな成果となった。

D:つながり続ける居場所・継続支援

【ケース①（就労準備）】

- ・就職した後も社会的に孤立しないように、戻ってこれる居場所として存在している。

- ・就労定着できるように見守っていく。

【ケース②（社会参加）】

・高校在学中に療育手帳を取得したことで、卒業後すぐに就労移行支援事業所と繋がることができた。

・困ったときに頼れる場所の一つとなれるよう、定期的に声を掛けてつながりを継続している。

【総括】

本人の意思や希望を最大限尊重し、必要な際にいつでも再接続可能な体制を提示できた。進路確定後も、本人の状況に応じた柔軟かつ緩やかな見守り、伴走支援を継続するなど、個々の状態や変化に合わせた適切な支援距離（距離感）を見極めていく。